

## 要旨

本研究は、現代中国語において、既存の言語形式を原形として略語が構成される過程を研究したものであり、まず、略語構成過程で生じる字の残留と消去に着眼して原形の分割単位を考察し、さらに、略語構成過程で生じる数詞の移動に関する規則を考察したものである。

第1章では、略語に関する先行研究を概観し、主要論点の中でも略語構成過程の解明が中心的課題であることを確認した。

次いで、略語構成過程における字の残留と消去のあり方から原形分割単位を考察し、第2章で「段」、第3章で「片」を提示した。

段は以下のように定義される。

- (1) i. 原形を略語と対照しつつ階層構造により複数の部分に分割する。ただし、各部分における字の残留と消去の選択のあり方は以下の r, a, d のいずれかとなるものとする。
  - r: 全体が略語中に残留する。
  - a: 一字のみ略語中に残留し他は消去される。
  - d: 全体が消去される。
- ii. 上記 i を満たした上で得られる部分の数が最小であるような原形分割は一通りに限られる。この分割で得られる部分を段と呼ぶ。

段の概念からは以下に示す略語構成過程の規則を提示できる。

- (2) 姉妹一对の規則：階層構造上姉妹関係ある段は最も多くて一对である。

(2)によると、例えば、“国防科学技术委员会”を原形とする略語が“国防科委”であって“国防科委会”となりえないことに説明がつく。

また、片は以下のように定義される。

- (3) 片とは、原形分割で得られる、以下の i ~ iii のいずれかに該当するものを指す。
  - i. 姉妹関係にある二字が一体となったもの。
  - ii. 二字以上からなる一つの形態素。音訳由来の形態素を指す。
  - iii. 上記 i, ii によって片を構成することができない一字。

各片における字の残留と消去の結果についても段と同様に r, a, d を示せるが、これにより以下の規則を提示できる。

- (4) ara 禁止の規則：a を選択した二つの片があるとき、これらの間には r を選択した片は存在しない。

(4)によると、例えば、“轻工业学院”を原形とする略語は“轻院”であるのに“上海轻工业学院”を原形とする略語は“上轻院”でなく“上轻”であることに ara 禁止の規則を用いて説明がつく。

なお、段、片いずれにおいても、以下のように定義される N については特別な扱いを要する。この点は第4章で考察した。

- (5) “第+数詞”は、“第二次世界大战”のように後方に一字の姉妹成分を持つときは姉妹成分とともに、“第一中学”の“第一”のように後方に一字の姉妹成分を持たないときは“第+数詞”単独で N となる。

段の概念では、N を常に一つの段と見なすことで姉妹一对の規則が常に成り立つ。片の概念では、N に

おける字の残留と消去のあり方を無視することで ara 禁止の規則が成り立つ。そのため、Nは片への分割で除外される単位と解しうる。すると、原形分割では「片及びN」への分割がなされるといえる。

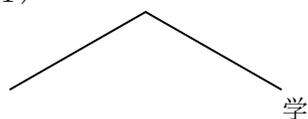
ここで、Nにおける字の残留と消去のあり方を反映したN内部の分割が問題となるが、N内部は「第>一字の語素>数詞」の順に優先的に消去されることから、「第」、「数詞」、「一字の語素」に分割されると見る。

第5章では、“中学小学”の略語“中小学”に残留する“学”、“男社員女社員”の略語“男女社員”に残留する“社員”など、先行研究のいう「原形中の等位要素各項が共通して持つ字」の残留を考察した。このような字は、原形中の等位要素各項で共通な階層構造上の位置を占め、その位置が略語でも保持されていることが考察から確認できた。これを受け、「原形中の等位要素各項が共通して持つ字」を以下のように修正する。

(6)原形中の等位要素各項が共通して持つ階層構造の枝及び、その階層構造の同じ位置を占める共通の字が一体となったもの。

上のように定義されるもののうち実際に略語に残留するものを本研究は共通成分と呼ぶ。例えば、上掲の略語“中小学”における共通成分は単に“学”の字ではなく以下のようなものである。

(図1)



例えば“农业、轻工业、重工业”を原形に構成される略語“农轻重”で“业”が略語に残留しえないことは、共通成分の概念からはじめて説明可能となる。

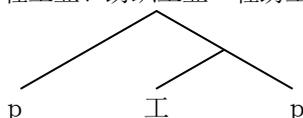
なお、一つの共通成分の階層構造では、共通成分の一部として略語に残留する字を支配しない終端節点は一つに限られる。このことから、例えば、“轻工业、纺织工业→轻纺工业”を原形とする略語構成で“轻纺工业”は構成可能だが“轻纺工”は構成されないことは、以下のように説明できる。

(図2)(pは共通成分の一部として略語に残留する字を支配しない終端節点を示す。)

轻工业、纺织工业→轻纺工业:共通成分に含まれる字は“工”、“业”。

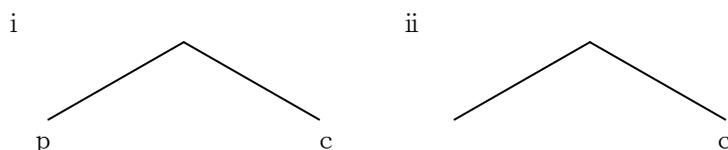


轻工业、纺织工业→轻纺工:これを仮に認めたとき共通成分に含まれる字は“工”，pが二つ生じる。



また、上の指摘を受け、共通成分の階層構造分析では、最下層で以下に示すiの階層構造が、それ以外の階層ではiiの階層構造が必ず得られる。

(図3)(cは共通成分の一部として略語に残留する字を支配する終端節点を示す。pは上の図に同じ。なお姉妹節点の前後関係は問わない。)



このことは、共通成分が上のi，iiを構成素とすることを示す。

第6章では，“第一研究室”，“第一外科”おのおのを原形として構成される“研一室”，“外一科”など，略語構成過程で字の残留と消去の選択に加えて生じうる数詞の移動をパターン化した。まず，字の残留と消去の選択の結果を所与として，数詞の移動が生じなかったとの仮定で得られる形式を仮定形式と呼ぶとき，以下の手順により仮定形式，略語双方について  $n$ ， $h$ ， $\alpha$ ， $\beta$  を用いたタイプを示す。

- (7) i. 原形中で  $N$  が後方に姉妹成分を持つとき，その姉妹成分の中で最も後方に位置する片を  $H$  とする。
- ii. 原形中で支配下の最も後方に  $H$  を持つ節点のうち階層構造の最上層に位置するものを  $\Delta$  とする。
- iii. 仮定形式及び略語それぞれのうち原形の  $\Delta$  支配下から残留した部分に着目する。原形中の  $N$  から残留した部分を  $n$ ， $H$  から残留したものを  $h$  とする。さらに， $n$  の前方の領域を  $\alpha$ ，後方の領域を  $\beta$  とする。ただし  $h$  があるときは  $n$  と  $h$  の間を  $\beta$  とする。ここで，仮定形式，略語それぞれのうち原形の  $\Delta$  支配下から残留した部分が  $n$ ， $h$ ， $\alpha$ ， $\beta$  のいずれからなるかに着目し，仮定形式及び略語のタイプを表示する。

例えば“上海第一毛纺织厂”を原形に略語“上毛一厂”が構成される場合，仮定形式“上( $\alpha$ )/一( $n$ )/毛( $\beta$ )/厂( $h$ )”は  $\alpha n \beta h$ ，略語“上毛( $\alpha$ )/一( $n$ )/厂( $h$ )”は  $\alpha n h$  と表示される。

この要領で個々の略語について仮定形式と略語のタイプを求めると，数詞の移動は仮定形式と略語のタイプの異なりをもたらす  $n$  の移動として以下の三パターンにまとめられる。

(8) 仮定形式/略語： $\alpha n \beta h / n \beta h$      $\alpha n \beta h / \alpha n h$      $n \beta h / \alpha n h$

つまり， $n$  の移動は仮定形式が  $\alpha n \beta h$  か  $n \beta h$  である場合に生じる。そこで，第7章ではこれら二タイプの仮定形式を対象に  $n$  の位置決定規則を検討した。

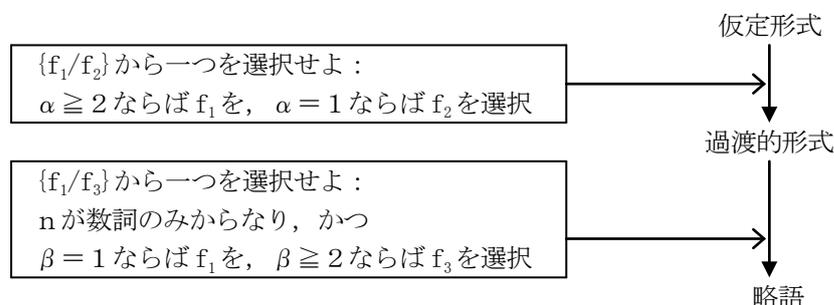
まず考えうる最も簡潔な規則は，以下に示す  $f_1 \sim f_3$  を想定し，これらが三者択一の選択肢群として仮定形式にはたらく略語中の  $n$  の位置が決まるものであろう。

- (9)  $f_1$  :  $n$  の位置を保持し仮定形式と同一のタイプに属する略語を構成する作用。
- $f_2$  :  $n$  を  $\alpha$  の前方に移動して  $n \beta h$  を構成する作用。
- $f_3$  :  $n$  を  $\beta$  の後方に移動して  $\alpha n h$  を構成する作用。

この場合， $f_1$ ， $f_2$  を選択するには仮定形式においてそれぞれ  $\beta$  が一字であること， $\alpha$  が一字であることが必要となる。しかし， $f_3$  を選択する条件は仮定形式が  $\alpha n \beta h$  か  $n \beta h$  かにより異なることが問題となる。

そこで，第一段階で  $f_1$ ， $f_2$  の二者択一が，第二段階で  $f_1$ ， $f_3$  の二者択一がはたらくような，選択肢群が二段階に分けてはたらく規則を想定し，第二段階のはたらく対象を過渡的形式と呼ぶと，以下に示すように選択の条件を統一した規則が構築できる。

(図4)



しかし，この規則は仮定形式  $\alpha n \beta h$ ， $n \beta h$  のみを対象としたものであり，他のタイプの仮定形式に適用すると誤った略語を構成しうるため，全ての仮定形式に有効な規則とするためには，第一段階を修正する必要がある。そこで，以下に示す  $f_4$ ， $f_5$  を導入し，第一段階では既出の  $f_1$  と  $f_4$ ， $f_5$  が仮定形式にはたらくものとする。

(10)  $f_4, f_5$ とも、手段は  $n$  の位置の保持,  $n$  の前方への移動いずれでもよい。

$f_4$ : 過渡的形式  $n \beta h$  を構成する作用。

$f_5$ : 過渡的形式  $\alpha n h$  を構成する作用。

さらに,  $f_1, f_4, f_5$  の作用の強さをそれぞれ  $F_1, F_4, F_5$ , とし, いかなるタイプの過渡的形式を構成する作用がどの程度の強さではたらくかに着眼する。その際, 過渡的形式は最も強くはたらく作用により構成され, 異なる過渡的形式を構成しようとする複数の作用が同じ強さではたらく場合は仮定形式における  $\alpha, \beta$  の字数が決め手となるとする。

ここで, 第一段階において,  $f_1, f_4, f_5$  が  $F_1 = F_4 > F_5 > 0$  を満たしてはたらくとすると, (図4)は全仮定形式に適用可能なものとなる。

最後に第8章で本研究を総括した。構成過程で生じる字の残留と消去の選択の規則を反映した原形分割単位を提示し, 字の残留と消去の選択をもとに数詞の位置決定規則を示した点が主な成果といえるが, 字の残留と消去の選択については, 主に生じ得ない結果を阻止する消極的規則の提示にとどまった。今後は, 現に生じた結果を根拠づける積極的規則を構築したい。